



児童期後期における社交不安(シャイネス)の発達的変化 : 対人場面における他者の意図の判断との関連から

相澤, 直樹
山根, 隆宏

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 8(2):67-75

(Issue Date)

2015-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81008826>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81008826>



児童期後期における社交不安（シャイネス）の発達的变化

－対人場面における他者の意図の判断との関連から－

Developments of social anxiety in late childhood: Relations to positive intent interpretations in interpersonal situations

相澤 直樹* 山根 隆宏**

Naoki AIZAWA* Takahiro YAMANE**

要約：本研究は児童期後期の社交不安（シャイネス）傾向と肯定的な対人場面における認知判断傾向との関連性を検討することを目的とした。小学4年生から6年生の計392名（男子194名、女子198名）を対象に、場面想定法による肯定的な対人場面における肯定的な他者意図判断を問う課題と児童・思春期シャイネス尺度を含む質問紙調査を実施した。性別と学年差を独立変数としシャイネス得点を従属変数とした分散分析の結果、女子が男子よりも強いシャイネス傾向を示したものの、シャイネスの発達的变化はみられなかった。また、シャイネス得点と対人場面における肯定的な他者意図判断との関連を検討したところおおむね無相関であった。一方、学年とシャイネス高低を独立変数とし、肯定的な他者意図判断傾向を従属変数とした2要因分散分析の結果、他者意図判断尺度の一部の得点について、学年とシャイネスの高低の交互作用がみられた。分析の結果、シャイネス低群では4年生から5年生時点で肯定的な他者意図判断傾向の低下がみられるのに対して、シャイネス高群では5年生から6年生時点で有意な低下がみられ、シャイネスの高低によって肯定的な他者意図判断の低下の時期にズレが生じることが示唆された。シャイネスと肯定的な他者意図判断の相互の関連性や発達的变化について、さらに詳細な検討の必要性が考察された。

キーワード：社交不安（シャイネス）、他者意図判断、児童期、場面想定法

問題と目的

近年、ひきこもりや不登校などに代表される心理社会的不適応を示す子どもや若者の増加が指摘されている。このような臨床的な問題の背景に社交不安障害（social anxiety disorder）ないしは社交不安（social anxiety）に起因する対人関係の障害が存在していることは少なくないだろう。社交不安とは、人から見られる可能性のある状況において過度の恐怖や不安を体験し、その行動や症状によって他者から否定的に評価されることを恐れ、そのために対人場면을回避するか、そうでない場合には非常に強い思いをするといった特徴を示す不安障害の一つである（American Psychiatric Association, 2013；貝谷, 2010）。子どもの社交不安においても基本的には成人のそれと同様の特徴を示す。例えば社交不安を示す子どもは社会的な場面で当惑したり恥をかいたりすることを恐れる。また、そのような社会的場面に出ると、ほとんど常にすぐさま不安反応が生じる。しかしながら、子どもの場合は泣き出す、かんしゃくを起こす、こわばる、しがみつく、尻込みをする、黙り込むなどの行動で示される点が成人とは異なる。

社交不安の子どもは親しい間柄ではそのような不安反応は生じず、大人との関わりや同年代の仲間関係において恐怖や不安を体験する（Rapee & Sweeney, 2005）。そのため社交不安の子どもは対人関係能力が乏しいわけではないといえる。

子どもの社交不安障害の有病率（prevalence rate）はおおむね5%から10%程度であることが報告されており、平均して7%程度であるとされる（Beesdo, Knappe, & Pine, 2009; Detweiler, Comer, & Albano, 2010）。ただし、子どもの場合は年齢により有病率に差がある可能性も指摘されている（Rapee & Sweeney, 2005）。社交不安障害の発症年齢は、他の不安障害と比較してもかなり低く、多くの研究で10代半ばでの平均発症年齢が示されている（Kashdan & Herbert, 2001; Lecrubier, Wittchen, Faravelli, Bobes, Patel, & Knapp, 2000）。社交不安障害は、10歳未満の子どもでは比較的まれなものであり、青年期中期から後期にかけて明らかに増加するという発達の推移が示されている（Bokhorst & Westenberg, 2011）。

以上のことは、一見して社交不安ないし社交不安障害が青年期中期以降に生じてくる問題と捉えられるようにみえるだろう。し

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授

** 奈良女子大学大学院生活環境科学系助教

（2014年9月30日 受付）
（2014年11月27日 受理）

かしながら、このことは社交不安障害の有病率や発症年齢が、子どもが医療機関や相談機関で診断や評価を受けた段階での指標であることを考慮する必要がある。また、社交不安障害の中核といえる対人場面での恐れや他者からの否定的な評価への不安は、さらにそれ以前の児童期前期においても同程度にみられることが示されている (Beidel & Turner, 1998; Campbell & Rapee, 1994)。したがって、発症年齢が示すよりも以前に臨床症状に至らないような社交不安の体験が生じている可能性がある。このことを考えると、社交不安、ないし、社交不安障害が臨床症状に至る以前、つまり児童期から社交不安に発展する発達的变化を検討していく必要があるといえる。

しかしながら、社交不安に関する研究の現状では、心理発達の観点からの検討は十分になされているとはいいがたい。我が国では古くから社交不安と同様の病態が対人恐怖として研究や臨床の対象となってきた (森田, 1960)。対人恐怖は臨床上的精神疾患としてだけでなく、思春期青年期にみられる発達途上の心理的問題として位置づけられ、心理発達の観点から多くの研究がなされてきた (小川, 1974; 福井, 2007)。一方で社交不安に関する研究が学習理論を基盤とする認知行動療法の発展と並行してなされてきたため、心理発達の観点からの検討が不足しているといえる。社交不安の治療の観点からの研究だけでなく予防的観点においても、前思春期から社交不安に至る過程を解明していく必要があるだろう。

前述のとおり、近年になり子どもの社交不安障害に関する研究がなされるようになり、それに向けた測定尺度も開発されている (須見・國重・館農・氏家・堤, 2010; 岡島・福原・秋田・坂野, 2008)。しかしながら、成人にみられる精神障害としての社交不安障害の諸症状が子どもにもそのまま当てはまるとは必ずしもいえない。一方で、子どもにみられる対人場面や対人相互作用にまつわる不安や困難は、これまでも様々な領域の研究者によって取り上げられてきた。主要なものだけでもシャイネス (shyness)、引っ込み思案 (social withdrawal)、社会的孤立 (isolation)、行動抑制 (behavioral inhibition) などが挙げられる。中でも、一連の研究においてもっとも使用されている概念がシャイネスである。特に、子どもや青年の日常的な羞恥心や不安体験をとらえるものとしてシャイネスに関する研究が多く蓄積されてきた。

このシャイネスと社交不安の関連については現在議論が行われている最中であるが、いくつかの研究でその類似性、親近性が指摘されている。たとえば、Beidel & Turner (1999/2006) は、社交不安も含めて前述した先行研究の諸概念を整理する試みを行っているが、その中で、シャイネスを比較的多様な人々の対人場面における不安をとらえるものと位置づけ、それと引っ込み思案の特徴がみられるものが社交不安に該当すると論じている。このBeidel & Turner (1999/2006) の整理に従うと、シャイネスの一部が社交不安に相当することになるが、多くの先行研究で示されているとおり (Buss, 1984; Cheek & Buss, 1981)、引っ込み思案にみられる対人場面の回避退却傾向はシャイネスの構成要素の一つとなっている。したがって、実質的にはシャイネスと社交不安の類似性はかなり高いものといえる。以上のように考えると、シャイネスは、子どもにみられる社交不安を自然にとらえる概念とし

て最も適するものとみなすことができる。そこで、本研究では社交不安の前駆の様態としてシャイネスを取り上げ、児童期における社交不安の発達的变化を検討することとした。

シャイネスは幼児期から思春期に向かって高まりながらおおむね14歳から17歳頃に頂点に達するものとされている (Cheek & Krasnoperova, 1999/2006)。しかしながら、シャイネスは発達段階に応じてその様相が異なることがいくつかの研究で指摘されている。例えば、Buss (1984) は、人生早期からみられる恐怖シャイネス (fearful shyness) とそれより後にあらわれる自意識シャイネス (self-conscious shyness) の2つに分けて捉えた。前者は新規場面や見知らぬ人との間に体験される不安反応であり、後者はフォーマルな場面や自分だけがみられると目立ってしまう状況と関連しており、おおむね4, 5歳ごろから体験されるものとされる。Crozier & Burnham (1990) は5歳から11歳の子どもの対象にシャイネスに関する面接調査を行ったところ、年齢によって恐怖シャイネスは一定程度みられるのに対して、自意識シャイネスは7, 8歳以降に高まることを示している。その後の研究では、自意識シャイネスの出現がそれよりも早期であることを示す研究もみられる (Crozier, 1999/2006)。一方でそのような発達的变化を検出できなかったとする報告もみられ (Crozier, 1995)、見解の不一致もみられる。このことから、シャイネスがどのように発達的に変化するのかを関連要因を同定しながら、さらに詳細な検討をおこなっていく必要があるだろう。

では、このシャイネスの発達的变化や個人差はどのような要因に関わっているだろうか。本研究ではシャイネスの発達的变化に関連する要因として、対人場面における認知の偏りを取り上げる。以下にその理由を述べる。

Buss (1984) はシャイネスを生理学的要素、認知的要素、行動的要素の3つに整理することを提唱した。このうち認知的要素というのは、公的な場での強い自意識、自己卑下的な考え、他者からの否定的評価を受けることへの懸念などの認知である。成人期の社交不安障害ではこの認知的要素が症状の維持において優勢となることもあり、認知行動モデルによる治療的アプローチが実践されている。また、子どもの不安障害についても、あいまいな状況に対する推論の誤りといった認知の誤りから不安障害に至る認知行動モデルが示唆されている (石川・坂野, 2005)。

以上のことや社交不安の臨床症状の特徴からも、特に対人関係における認知判断の発達が重要な要因として考えられる。この点に関連する研究としてDodgeらの敵意帰属研究がある (Crick & Dodge, 1994)。敵意帰属とは、攻撃的な児童青年にみられる認知様式であり、対人関係のトラブルを相手の敵意に帰属しやすい傾向を指す。この敵意帰属と攻撃行動の関連には、特に8歳ごろから12歳ごろに強まるとされる (Orobio de Castro, Veerman, Koops, Bosch, & Monshouwer, 2002)。この敵意帰属は社交不安を説明するものではないことから、相澤 (2011) は社交不安に密接に関連する他者認知として嫌悪判断を提唱した。嫌悪判断とは日常生活の中で何らかの形で他者との関係が絶たれる場面 (対人疎外場面) において、それを偶然や何らかの外的要因によるものとみなさずに、他者の嫌悪によるものと認知する傾向を指す。一般青年大学生を対象とした調査では、嫌悪判断は対人不安傾向や

相互作用不安傾向と正の関連があることが示された（相澤，2011）。すでに子どもを対象とした研究においても，このような対人場面における否定的な認知の偏りと社交不安との関連が繰り返し検証されており，社交不安の高い子どもは，曖昧な対人場面や相手の意図の不明確な対人場面をより否定的なものと予測したり解釈したりしやすいことが示唆されている（Barrett, Rapee, Dadds, & Ryan, 1996; Muris, Merckelbach, & Damsma, 2000）。

以上のような子どもにおける認知の偏りと社交不安との関連は妥当なものと考えられる。一方で，近年抑うつや不安における肯定的感情の独自の機能が指摘されるようになり，社交不安の研究の中でも肯定的認知と症状との関連が注目されるようになった（Gilboa-Schechtman, Shanchar, & Sahar, 2014）。すでに成人を対象としたいくつかの研究では，社交不安の強い人が肯定的な対人場面においても肯定的な認知をおこなわないことが検証されている（Vassilopoulos & Banerjee, 2008; Gilboa-Schechtman, Franklin, & Foa, 2000）。しかしながら，現時点では，子どもを対象として肯定的な対人場面の認知判断と社交不安やシャイネスとの関連を検討したものはほとんど見られない。以上のような肯定的認知の障害は，これまで繰り返し示されてきた否定的な認知の偏りとはまた別種のものとして位置づけられており，社交不安やシャイネスの認知特徴の理解にとって重要な要因であると考えられる。

そこで本研究では児童期後期から思春期前期にかけて高まるとされる社交不安（シャイネス）傾向と肯定的な対人場面における認知判断との関連を検討することを目的とする。具体的には小学校4年生から6年生の児童生徒を対象とする質問紙調査を通じて，シャイネス，ならびに，肯定的な対人場面における肯定的な他者意図の認知の発達的变化を検討する。

方法

1. 調査協力者と調査手続き

調査協力者は，小学4年生85名，5年生152名，6年生155名の計392名（男子194名，女子198名）であった。調査は，2013年12月から2014年1月にかけて，A地方の公立小学校の協力の下，担任教諭を通じて質問紙を調査協力者に配付し，記入を求めた。調査に当たっては無記名で回答を求め，プライバシーの保持に努めた。なお，調査の実施に当たっては神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究倫理審査委員会の承認を得た。

2. 調査内容

i) 他者意図判断の測定：児童が日常生活の中で遭遇しやすいと思われる，相手の意図が曖昧な肯定的な対人場面を4場面作成し調査に用いた。それらはいずれも肯定的な内容（友達に好意を持たれる，助けてもらうなど）であったが，対人場面の体験を扱う以上，児童である調査協力者に心理的負担を課す可能性があった。そのため，本研究では以下の対策をとった。まず，提示されたある場面の自分の認知ではなく，第3者である仮想的人物の認知について回答を求める手法をとった。また，攻撃性研究において回答の歪みを回避するために，場面想定に登場する主人公の判断の正当性の評価を求める手法がとられている（阿部・高木，2006）。この手法を参考に，本研究でも登場する主人公の肯定的な判断に関する正当性や理解度を回答させる形式を用いた。以上から，他者が主人公に肯定的な関与を示し，かつ，その意図があいまいな場면을提示し，その主人公が示す肯定的な相手の意図の判断について，それが正しいと思うかどうかを3件法（思う，思わない，わからない），その気持ちが理解できるのかどうかを3件法（わかる，わからない，どちらともいえない）で回答を求めた。

対人場面は4場面を設定し，性差の影響を減らすために主人公が男子である2場面，女子である2場面で構成した。4場面は，①キャンプの昼食の班分けで困っているときに，別の子どもが「一緒に食べよう」と声をかけてくれた際に，主人公がそれを自分のためにしてくれたと考える場面，②授業で自分の発表と異なる意見が多くある状況で友人が自分の意見に賛成してくれたことを，主人公が自分のためにしてくれたと考える場面，③初めてのクラスでの自己紹介でうまくできない際に，前の席の子どもが微笑んでみているのを，主人公が自分の話を聞いてくれると考える場面，④発表会に向けた歌の練習で各自が歌い終わったあとに先生からみんなの前で歌うように指示され，主人公が自分の歌を評価してくれたと考える場面，といった内容であった。なお，場面の作成にあたっては，場面の内容的妥当性や調査協力者に理解できる内容かどうかについて，小学校教員2名によって検討を依頼し，その結果に基づき表現等を必要に応じて修正した。

ii) 社交不安（シャイネス）：児童・思春期シャイネス尺度（菅原，2003）を使用した。不安傾向3項目（知らない人に会うのは恥ずかしい，先生と一対一で話すのは緊張する，私は恥ずかしがりやだと思う），消極傾向3項目（自分から友だちに話しかけることは少ない，クラスの中では目立つほうではない，みんなの中では黙っていることが多い）の計6項目から構成される。回答は3件法（1：いいえ，2：どちらでもない，3：はい）で求めた。

Table 1 場面ごとの回答選択率（％）

	正しさ			気持ち		
	思　　う	思わない	わからない	わかる	わからない	どちらとも いえない
場面①	65.31	16.33	18.37	61.73	14.80	23.47
場面②	23.47	56.38	20.15	38.52	34.44	27.04
場面③	58.16	24.49	17.35	52.30	24.23	23.47
場面④	37.76	37.50	24.74	35.46	39.29	25.26

結果

1. 各尺度得点の算出と基礎統計量

他者意図判断の各項目に対する回答の分布を検討したところ、ほぼ平坦な分布や二山型の分布を示すものが多く見られた (Table 1)。このことから、他者意図判断に対する回答は質的変数として扱う方が妥当であると考えられた。一方で、各場面对でそれぞれの選択の出現度数についてクロス集計を作成し、クラメールの連関係数を算出したところ、すべての場面間で有意な連関がみられた (「正しさ」で $V=.13\sim.19$ でいずれも $p<.01$, 「わかる」で $V=.23\sim.30$ でいずれも $p<.01$)。そこで、各調査協力者ごとに4場面の中でそれぞれの回答の出現頻度を算出し、「正しさ」を問う質問項目については「正しさ—思う」得点, 「正しさ—思わない」得点, 「正しさ—わからない」得点, 「気持ち」を問う質問項目については「気持ち—わかる」得点, 「気持ち—わからない」得点, 「気持ち—どちらともいえない」得点とし、各得点の分布を検討したところ、一部低得点に偏るものの、いずれも連続変数を示唆するなどらかな分布が観察された。そこで、本研究ではこれらの得点を分析に用いることにした。

また、シャイネス尺度については、先行研究に従い、不安傾向と消極傾向の各3項目で下位尺度得点を算出した。信頼性係数 (α 係数) は、不安傾向で .66、消極傾向で .62 と比較的低い値にとどまったが、項目の少なさによる影響が大きいものと考えられた。項目間の相関係数を見ると、不安傾向で .29~.44、消極傾向で .34~.42 といずれも有意な正の値を示していることから、各下位尺度

は十分な等質性を持つものと考えられた。以上の他者意図判断各得点、ならびに、シャイネス尺度の2下位尺度の平均値と標準偏差を Table 2 に示す。

2. 性別と学年によるシャイネス傾向の発達的变化

シャイネス傾向の発達的变化を検討するために、性別と学年を独立変数とし、シャイネス得点を従属変数とした2要因の分散分析をおこなった (Table 3)。その結果、シャイネス得点は不安傾向でのみ性別の有意差があり ($F(1,367)=17.44, p<.01$)、女子は男子よりもシャイネス得点が高いという結果であった。また、消極傾向では交互作用が有意であり ($F(2,367)=3.75, p<.05$)、女子で小学校6年生時の低下がみられた。

3. 他者意図判断とシャイネスの相関

他者意図判断とシャイネスの関連をみるために相関係数を算出した (Table 4)。その結果、「正しさ—思わない」で不安傾向、消極傾向の両者との間に弱いながらも有意な負の相関、また、「正しさ—分からない」で消極傾向との間に弱いながらも正の相関がみられた。前者の結果は、不安傾向や消極傾向が高い人ほど「肯定的認知判断を正しいと思わない」という傾向が低くなることを示唆しており、シャイネスが肯定的認知判断と負の関連があるとの仮説に反する結果である。一方、後者の結果は、消極傾向が高い人ほど「肯定的認知判断について分からない」と答える傾向が高いことを示唆し、仮説に一致する結果である。また、「気持ち—分からない」についても、不安傾向と消極傾向の両者との間に弱いながらも有意な負の相関が得られた。この結果も、「正しさ—思わない」の結果と同様に、仮説に反する結果である。

Table 2 各尺度得点の平均値と標準偏差

	正しさ			気持ち			シャイネス尺度	
	思う	思わない	わからない	わかる	わからない	どちらともいえない	不安傾向	消極傾向
平均値	1.85	1.35	.81	1.88	1.13	.99	5.44	6.05
SD	1.13	1.10	.96	1.31	1.18	1.10	1.73	2.01

Table 3 学年別×性別シャイネス尺度平均得点 (SD) の分散分析結果

	男子			女子			主効果 学年 性別 交互作用		
	4年生	5年生	6年生	4年生	5年生	6年生			
N	45	74	75	40	78	80			
不安傾向	6.11 (1.91)	5.53 (2.08)	6.07 (2.03)	6.60 (2.05)	6.55 (1.87)	5.70 (1.93)	1.56	3.38	4.80**
消極傾向	5.02 (1.78)	4.86 (1.66)	5.28 (1.61)	6.12 (1.92)	5.64 (1.67)	5.83 (1.66)	1.53	20.62**	.75

** $p<.01$

Table 4 他者意図判断とシャイネスの相関

	正しさ			気持ち		
	思う	思わない	わからない	わかる	わからない	どちらともいえない
シャイネス						
不安傾向	0.06	-.11*	.05	.09	-.14**	.03
消極傾向	0.03	-.16**	.15**	.11*	-.13**	.04

** $p<.01$ * $p<.05$

4. 学年とシャイネスによる他者意図判断の発達的变化

学年差とシャイネス得点によって他者意図判断が発達的にどのように変化するかを検討するために、学年とシャイネス得点を独立変数とし、他者意図判断を従属変数とした2要因の分散分析をおこなった (Table 5)。シャイネス得点は平均値を基準に高群、低群に分類した。分散分析の結果、「正しさ」に関する得点については、「正しさ－思う」、「正しさ－思わない」の交互作用が有意であった ($F(2, 386) = 4.62, p < .05$; $F(2, 386) = 4.96, p < .01$)。単純主効果の検討の結果、「正しさ－思う」ではシャイネス低群で4年生が5・6年生よりも得点が高く、シャイネス高群では4・5年生が6年生よりも高い得点であった (Figure 1)。また、5年生においてのみ両群に有意差がみられた。「正しさ－思わない」では、シャイネス高群のみ6年生が5年生よりも高い得点であり、5年生でのみシャイネス低群が高い群よりも高い得点であった (Figure 2)。そのほか、「正しさ－わからない」では学年の主効果が有意であり ($F(2, 386) = 8.00, p < .001$)、多重比較の結果からいずれも4年生よりも6年生の得点が高かった。さらに、「正しさ－わからない」のシャイネスの主効果が有意であり ($F(1, 386) = 4.63, p < .05$)、「正しさ－わからない」ではシャイネス高群が低群よりも高得点であった。以上の結果は、まず第一に、「正しさ」に関する得点については、「正しさ－思う」が学年が上がるにつれて低下するとともに、「正しさ－思わない」、「正しさ－わからない」が高まる傾向にあることを示唆していると思われるが、前述のように、今回の測定法ではこれらの得点が相互に独立ではないので、学年にともなう肯定的な認知判断の低下という同一の現象を反映しているものと考えられる。また、「正しさ－思う」と「正しさ－思わない」で示された交互作用は、学年にともなうこれらの変化の時期がシャイネス高群と低群で異なることを示唆するものと思われる。

「気持ち」に関する得点については、「気持ち－わかる」で交互作用が有意であった ($F(2, 386) = 4.53, p < .05$)。単純主効果の検討の結果、「気持ち－わかる」でも、シャイネス低群で4年生が5・6年生よりも得点が高く、シャイネス高群では4・5年生が6年生よりも高い得点であり、5年生のみ両群に有意差がみられた (Figure 3)。また、「気持ち－わからない」、「気持ち－どちら

ともいえない」は学年の主効果が有意であり ($F(2, 386) = 8.05, p < .001$; $F(2, 386) = 3.68, p < .05$)、多重比較の結果からいずれも4年生よりも6年生の得点が高かった。さらに、「気持ち－わからない」のシャイネスの主効果が有意であり ($F(1, 386) = 4.63, p < .05$; $F(1, 386) = 5.23, p < .05$)、シャイネス低群が高群よりもそれぞれ高得点であった。以上の結果から、まず第一に、「気持ち－わかる」の学年による低下、「気持ち－わからない」の学年による高まりがみられたが、このことは、「正しさ」に関する結果と同様に、肯定的認知の学年による低下を反映しているものと考えられる。また、「気持ち－わかる」にみられた交互作用は、シャイネス高群と低群でその低下の時期にズレがみられることを示唆するものと思われる。

考察

本研究では、児童期後期の小学4年生から6年生を対象に、シャイネスと肯定的な対人場面における認知判断との関連を検討した。シャイネスの発達的变化については、女子の方が男子より強いシャイネス傾向を示したものの、有意な学年差はみられなかった。また、シャイネスと肯定的な対人場面における肯定的な他者意図判断の関連を検討したところ仮説に一致するような相関関係は検出されなかった。一方で、シャイネス高群低群ごとに分けて肯定的な他者意図判断の学年差を検討したところ、シャイネス低群では4年生から5年生時点での有意な低下がみられるのに対して、シャイネス高群では5年生から6年生の時点で有意な低下が生じるといった、肯定的認知の低下の時期のズレがみられることが示唆された。

本研究では、女子の方が男子より強いシャイネスを示した一方で、学年による有意差はみられなかった。前述のとおり、近年の社交不安障害に関する研究は、この病態が青年期中期から後期に最も出現しやすいことを示している。したがって、一般の子どものシャイネスも、それ以前にあたる児童期後期の段階で徐々に高まることが想定される。しかしながら、社交不安に関する先行研究の中では、これと符合する結果を示すものもみられる一方で (岡島他, 2008; 笹川・高橋・佐藤・赤松・嶋田・野村, 2009)、むし

Table 5 学年別×シャイネス高低群別認知判断傾向平均得点 (SD) の分散分析結果

	シャイネス低群			シャイネス高群						交互作用	多重比較
	4年生	5年生	6年生	4年生	5年生	6年生	主効果				
	<i>N</i>	39	78	86	46	74	69	学年	シャイネス		
正しさー思う		2.38 (0.99)	1.74 (1.06)	1.62 (1.16)	2.17 (0.95)	2.19 (1.15)	1.36 (1.07)	15.94***	.00	4.62*	
正しさー思わない		1.18 (1.05)	1.59 (1.07)	1.51 (1.10)	1.26 (1.02)	.91 (1.00)	1.49 (1.18)	2.81	3.33	4.96**	
正しさーわからない		.44 (0.75)	.67 (0.94)	.87 (0.89)	.57 (0.69)	.91 (1.04)	1.14 (1.13)	8.00***	4.63*	.14	4年生<6年生
気持ちーわかる		2.44 (1.19)	1.74 (1.28)	1.51 (1.26)	2.33 (1.03)	2.38 (1.38)	1.35 (1.20)	18.37***	.84	4.53*	
気持ちーわからない		.97 (1.04)	1.28 (1.28)	1.41 (1.24)	.70 (0.99)	.73 (1.04)	1.41 (1.17)	8.05***	5.23*	2.18	4,5年生<6年生
気持ちーどちらともいえない		.59 (0.85)	.97 (1.03)	1.08 (1.09)	.98 (0.91)	.89 (1.13)	1.25 (1.31)	3.68*	1.88	1.33	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

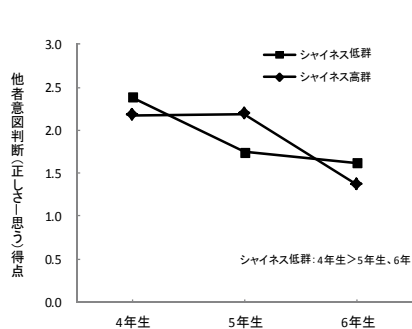


Figure 1 学年別およびシャイネス高低群による他者意図判断（正しいと思う）得点

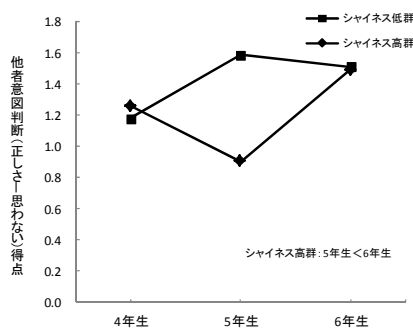


Figure 2 学年別およびシャイネス高低群による他者意図判断（正しいと思わない）得点

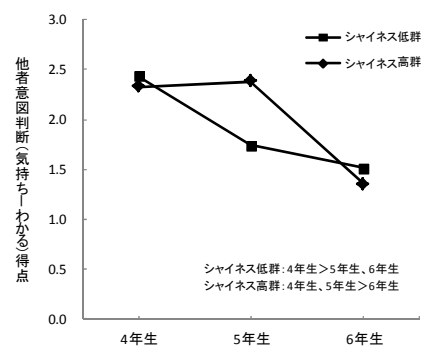


Figure 3 学年別およびシャイネス高低群による他者意図判断（気持ちわかる）得点

ろ、低年齢の児童の方が高い得点を示したことを報告するものもある (Epkins, 2002; 岡田・谷・大西・中島・辻井, 2012)。このような不一致には、使用尺度の種類や測定法（自己報告か他者評定か）などが密接に関連するものと考えられるが、同時に社交不安やシャイネスの発達の複雑さにも起因するものと思われる。

シャイネスが発達段階に応じて質的な変化を示すように (Crozier, 1999), ひとえに対人場面における不安といっても、どのようなことに不安を感じるのか、どのような場面で感じるのかといった点は年齢段階ごとに異なる可能性がある。たとえば, Wentenberg, Drewes, Goedhart, Siebelink, & Treffers (2004) は, 3つの下位尺度, つまり, 「処罰されることへの恐怖」, 「社会的に評価されることへの恐怖」, 「行為が評価されることへの恐怖」ごとに発達の変化を検討したところ, 前者は加齢とともに減少するのに対して, 後2者は逆に増加傾向を示すことを検証した。また, 他の研究では, 場面状況ごとに分けて検討をおこない, 「インフォーマルな対話や相互作用状況」では加齢による変化は見られなかったが, 「フォーマルな対話と相互作用状況」では加齢による明確な増加が示された (Sumter, Bokhorst, & Westenberg, 2009)。本研究で用いたシャイネス尺度は, このようなシャイネス体験の詳細な質的差異を反映しないものであったため, 加齢による変化を検出できなかった可能性が考えられる。

一方で, 本研究では, シャイネスと肯定的な他者意図判断との関連について予測されるような結果は得られなかった。先行研究においては, 社交不安と否定的な他者意図判断との間に明確な正の関連がみられるのが一般的であり, また, 理論上の想定としてもシャイネスと肯定的な体験の間には負の関連が期待される。実際, 一般大学生を対象とした研究で, 社交不安傾向の高い人が肯定的, ないしは, 曖昧な対人場面に対して肯定的解釈をおこなう程度が少ないことが示されている (Constans, Penn, Ihen, & Hope, 1999; 伊藤・西山 2010)。このことからすると, 本研究の結果は理論上の仮説に矛盾するものと考えられる。

ただし, 肯定的な対人場面における肯定的な他者意図解釈の障害といっても, 実際には多種多様なパターンが考えられている。肯定的な対人場面において「肯定的な解釈が少ない」ことが一般的なものと考えられ, 本研究ではこの観点から肯定的認知の問題を測定している。しかし, それ以外にも肯定的な対人場面の問題としては, 肯定的な対人場面にもかかわらず「否定的な意図解釈をおこなう」といった場合もある。あるいは, 肯定的な対人場面

にもかかわらず肯定的な判断を「割り引く (discounting)」といった様式も含まれてくる。成人を対象とした先行研究の中では, 後2者の観点からの肯定的な対人場面における認知の偏りと社交不安との間に有意な正の関連が検証されている (Voncken, Bögels, & de Vries, 2003; Vassilopoulos, 2006)。以上の観点を踏まえて, Vassilopoulos & Banerjee (2008) の研究では, 肯定的解釈の程度と肯定的解釈の「割り引き」の両者が同時に検討されており, 後者の「割り引き」との間でのみ有意な正の関連が示されている。社交不安やシャイネスにおける肯定的解釈に関する研究はまだ萌芽的な段階にあるので今後の研究による詳細な検討が必要であるが, 肯定的な対人場面の認知の障害と言っても, 意図解釈のパターンの違いにより社交不安との関連が異なる可能性が考えられる。この点については, それぞれの肯定的な対人場面の認知判断の特徴と社交不安との関連を検討する必要がある。

以上のように, シャイネスの発達の推移やシャイネスと肯定的な他者意図判断との関連に有意な結果は得られなかったが, シャイネスの高低と学年を要因とした分析では有意な関連が示された。つまり, 場面想定法各得点を従属変数とするシャイネス高低群と学年の2要因分散分析の結果, おもにシャイネス高群低群のいずれにおいても学年が上がるに従って肯定的な意図判断が低下するが, 低群では主に4年から5年にかけて有意な低下がみられたのに対し, 高群では5年から6年にかけて有意な低下がみられた。以上の結果は, 肯定的な他者意図判断がこの時期の加齢により低下する傾向にあるとともに, シャイネス高群と低群でその時期に若干のずれがあることを示唆するものと思われる。

これまでの研究の中では, 明田・一前・三本 (2001) が小学6年生までを対象とした研究で, 高学年になるほど好意的意図帰属が低下するとの結果を報告しており, 行為そのものや手がかりに関する弁別的な吟味力の表れと考察している。ただ, 現時点では, 肯定的な認知判断傾向に関する研究そのものが未だ萌芽的段階にあるため, 上記の発達の傾向の一般妥当性については今後の慎重な検討が必要になる。しかしながら, 確かに前思春期にあたる児童期後期は, 子どもがさまざまな点で自分自身や他者に対する見方の変化を体験する時期でもある。たとえば, 自由記述法を用いた対人認知発達研究は, 小学校低学年から高学年にかけて, 他者のとらえ方が具体的・表面的・周回的・自己中心的なものから抽象的・内面的・中心的・脱自己中心的なものに移行するとの仮説を提示している (川端, 2003)。実際の研究においては, 自由記述

という複雑な調査手法の影響もあり仮説を支持する結果とそうでない結果が混在しているものの(村山, 1979; 川端, 2003), 理論的観点からは十分に考えられるものである。さらに, 従来肯定的な認知の偏りについてはポジティブ・イリュージョン研究が著名であるが, その発達の変化を示した研究で同様に小学校高学年から中学高校時期にかけてポジティブ認知の低下が報告されている(外山, 2003)。以上のような先行研究の知見を考慮すると, 本研究で見られた肯定的な他者意図判断の低下も, 表面的で自己中心的な他者認知の在り方から, 抽象的で脱自己中心的なそれへの移行を反映している可能性が考えられる。

同時に, このような低下の時期がシャイネス高群と低群で差がみられ, シャイネス高群の方が若干遅くなる傾向がみられた。この点についてはシャイネスに特有の対人関係の少なさの影響が考えられる。つまり, 前述のとおり児童期後期においては, それまでの表面的, 具体的, 自己中心的な他者認知の在り方から, より内面的で, 抽象的, 一般的なあり方へと変化するとされる(村山, 1979)。このような変化にとっては実際の対人関係の経験が重要になってくるものと思われる。しかしながら, 社交不安の高い子どもは, 対人関係を回避しやすい傾向にあるために, 対人的なソーシャルスキルの獲得に問題が生じやすいとの研究知見が示されている(Beidel & Turner, 1998; Spence, Donovan, & Brechman-Toussaint, 1999)。また, 少数ながらも親友とみなせる友だちがいることが少ないが, 相互のコミュニケーションの少なさや親密さの欠如など, 対人関係としての質の低いものであるともされている(Schneider, 1999)。このような質量両面での対人関係の貧困さのために, 前述の自己中心的で表面的な他者意図認知から実際の脱自己中心的な認知への移行が遅れることが想定される。さらに, このような遅延は, そのような対人認知の変化が他の児童より遅れて比較的急激に体験されることになりやすく, シャイネス傾向が高い人の傷つき体験に結びつきやすいものとも考えられる。そして, そのような経験がより一層シャイネス傾向を高める可能性も考えられる。本研究の結果は, このようなシャイネス高群における対人場面の認知判断の発達の変化を反映しているのではないかと考えられる。

ただし, 本研究の主題である肯定的な他者意図判断については未だ研究知見が少ない現状にある。本研究の測定法は, 明田・一前・三本(2001)と同様の加齢に伴う肯定的な他者意図判断の低下を示しており, この点では先行研究と一致した結果が得られている。しかしながら, 本研究では, 他者意図判断測定の妥当性を確認するために必要な尺度等が実施されておらず, また, シャイネス尺度との間にも仮説通りの有意な関連が検出されなかった。このために, 他者意図判断測定の妥当性が検討できていない。以上のことは, 本研究の重大な問題点であると考えられるため, 今後この測定法の妥当性を確認するための研究が必要である。また, 今回用いたシャイネス尺度も, 現在使用されている同種の関連尺度の中で最も項目数の少ないものを選択したが, その結果, シャイネスの多様な特性を弁別的にとらえることに不足があった可能性がある。したがって, 今後はこの点を考慮して, より詳細な社交不安との関連を調べる必要があると思われる。さらに, 今回示されたような肯定的認知の変化は必ずしも認知判断面での変化の

みを反映しているとは限らない。児童期から前思春期にあたるこの時期には, 実際の友達との関わりや友達関係も大きく変化してくる時期であると思われる。とくに, 学校内でのいじめや非行の増加に代表されるように, 対人関係において他者から否定的に評価されたり, 他者を否定的に評価したりといった経験が増加してくる可能性も考えられる。そのような実際の友人関係の体験の変化がおのずと対人場面における体験の認知判断に影響している可能性も考えられる。以上のように, 今回観察された肯定的な認知判断の低下の背景には, さまざまな複合的な要因の影響が想定されるので, 今後より慎重な検討が必要であると思われる。最後に, 今回は, 肯定的な他者意図判断のみに注目したが, 社交不安との関連を考慮すると, やはり否定的な他者意図判断もあわせて調査し, それらの発達の変化との関連を検討する必要があると考えられる。その点では, 調査協力者への負担に細心の注意をはらいつつ, 否定的な内容の場面想定法を実施する可能性を検討しなければならないだろう。以上のような問題はあるものの, 社交不安における対人場面の認知判断傾向を発達的な課題に即して解明することは, これらの症状や悩みの理解と解決に大きく貢献するものと考えられる。

<付記>

本研究は, JSPS 科研費24530867 の助成を受けたものです。

<引用文献>

- 相澤直樹(2011). 対人葛藤場面における他者の意図の判断と情緒反応について―場面想定法による敵意帰属と嫌悪判断の測定とその妥当性― 心理臨床学研究, **29**, 365-370.
- 明田芳久・一前春子・三本哲也(2001). 児童の仲間関係における意図帰属と対人行動:Dodgeの社会的情報処理モデルによる検討 上智大学心理学年報, **25**, 11-27.
- 阿部晋吾・高木修(2006). 自己愛傾向が怒り表出の正当性評価に及ぼす影響 心理学研究, **77**, 170-176.
- American Psychiatric Association and American Psychiatric Association DSM-5 Task Force (2013). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders: DSM-5*. Washington, DC: American Psychiatric Publishing.
- Barrett, P. M., Rapee, R. M., Dadds, M. M., & Ryan, S. M. (1996). Family enhancement of cognitive style in anxious and aggressive children. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **24**, 187-203. doi: 10.1007/BF01441484
- Beidel, D. C. & Turner, S. M. (1998). *Shy children, phobic adults: nature and treatment of social phobia*. Washington, DC: American Psychological Association.
- Beidel, D. C. & Turner, S. M. (1999). The natural course of shyness and related Syndrome. In L.A. Schmidt and J. Schulkim (Eds) *Extreme fear, Shyness, and Social phobia Origins, biological mechanisms, and clinical outcomes*. NY: Oxford University Press, pp.203-223. (貝谷久宣・不安・抑うつ臨床研究会監訳(2006) 社会不安障害とシャイネス: 発達心理学と神経心理学的アプローチ 日本評論社)

- Beesdo, K., Knappe, S. & Pine, D. S. (2009). Anxiety and anxiety disorders in children and adolescents: Developmental issues and implications for DSM-V. *Psychiatric Clinics of North America*, **32**, 483-524. doi: 10.1016/j.psc.2009.06.002
- Bokhorst, C. L. & Westenberg, P. M. (2011). Social anxiety disorder: A normal fear gone awry? In W. K. Silverman & P. L. Field. (eds) *Anxiety disorders in children and adolescents*. Cambridge : Cambridge University Press, pp.90-102.
- Buss, A. H. (1984). A conception of shyness. In J. A. Daly & J. C. McCroskey (Eds.) *Avoiding communication: Shyness, reticence and communication apprehension*. London : Sage, pp.39-49.
- Campbell, M. A. & Rapee, R. M. (1994). The nature of feared outcome representations in children. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **22**, 99-111. doi: 10.1007/BF02169258
- Cheek, J. M. & Buss, A. H. (1981). Shyness and Sociability. *Journal of Personality and Social Psychology*, **41**, 330-339. doi : 10. 1037/0022-3514. 41. 2. 330
- Cheek, J. M. & Krasnoperova, E. N. (1999). Varieties of shyness in adolescence and adulthood. In L. A. Schmidt & J. Schulkin (Eds.) *Extreme fear, shyness, and social phobia: Origins, biological mechanisms, and clinical outcomes*. NY : Oxford University Press, pp.224-250. (貝谷久宣・不安・抑うつ臨床研究会監訳 (2006). 社会不安障害とシャイネス : 発達心理学と神経心理学的アプローチ 日本評論社)
- Constans, J. I., Penn, D. L., Ihen, G. H., & Hope, D. A. (1999). Interpretive biases for ambiguous stimuli in social anxiety. *Behavior Research and Therapy*, **37**, 643-651. doi: 10.1016/S0005-7967 (98) 00180-6
- Crick, N. R. & Dodge, K. A. (1994). A review and reformulation of social information-processing mechanism in children's social adjustment. *Psychological Bulletin*, **115**, 74-101. doi: 10.1037/0033-2909.115.1.74
- Crozier, W. R. (1995). Shyness and self-esteem in middle childhood. *British Journal of Educational Psychology*, **65**, 85-95. doi: 10.1111/j.2044-8279.1995.tb01133.x
- Crozier, W. R. (1999). Individual differences in childhood shyness: Distinguishing fearful and self-conscious shyness. In L. A. Schmidt & J. Schulkin (Eds). *Extreme fear, shyness, and social phobia: Origins, biological mechanisms, and clinical outcomes*. NY : Oxford University Press, pp.14-29. (貝谷久宣・不安・抑うつ臨床研究会監訳 (2006). 社会不安障害とシャイネス : 発達心理学と神経心理学的アプローチ 日本評論社)
- Crozier, W. R. & Burnham, M. (1990). Age-related differences in children's understanding of shyness. *British Journal of Developmental Psychology*, **8**, 179-185. doi: 10.1111/j.2044-835X.1990.tb00832.x
- Detweiler, M. F., Comer, J. S., & Albano, A. M. (2010). Social anxiety in children and adolescents: Biological, developmental, and social considerations. In S. G. Hofman & P. M. DiBartolo (Eds.) *Social anxiety: Clinical, developmental, and social perspectives*. Amsterdam : Academic Press, pp.223-270.
- Epkins, C. C. (2002). A comparison of two self-report measures of children's social anxiety in clinical and community samples. *Journal of Clinical Child and Adolescent Psychology*, **31**, 69-79.
- 福井康之 (2007). 青年期の対人恐怖 : 自己試練の苦悩から人格成熟へ 金剛出版
- 伊藤武人・西山薫. (2010). 社交不安傾向者の社交場面での肯定的情報に対する解釈に関する研究 (一般演題 (ポスター発表), 切れる最新の理論と途切れない地道な実践) 日本行動療学会大会発表論文集, **36**, 364-365.
- Gilboa-Schechtman, E., Franklin, M. E., & Foa, E. B. (2000). Anticipated reactions to social events: Differences among individuals with generalized social phobia, obsessive compulsive disorder, and nonanxious controls. *Cognitive Therapy and Research*, **24**, 731-746.
- Gilboa-Schechtman, E., Shanchar, I., & Sahar, Y. (2014). Positivity impairment as a broad-based feature of social anxiety. In J.W. Weeks (Ed.) *The Wiley Blackwell handbook of social anxiety disorder*. Chichester, UK: Wiley Blackwell.
- 貝谷久宣 (2010). 社交不安障害 新興医学出版社
- 石川信一・坂野雄二 (2005). 児童期不安症状の認知行動モデル構築の試み 行動療法研究, **31**, 159-176.
- Kashdan, T. B. & Herbert, J. D. (2001). Social anxiety disorder in childhood and adolescence: Current status and future directions. *Clinical Child and Family Psychology Review*, **4**, 37-61. doi: 10.1023/A:1009576610507
- 川端美穂 (2003). 児童が学級のメンバーの差異を捉える視点 : 個人的構成概念の分析から 発達心理学研究, **14**, 1-13.
- Lecrubier, Y., Wittchen, H. U., Faravelli, C., Bobes, J., Patel, A., & Knapp, M. (2000). A European perspective on social anxiety disorder. *European Psychiatry*, **15**, 5-16. doi: 10.1016/S0924-9338 (00) 00216-9
- 森田正馬 (1960). 神経質の本態と療法 : 精神生活の開眼 白揚社
- 村山久美子 (1979). 自由記述に現われた対人認知の発達の研究 -2 心理学研究, **49**, 303-309. doi: 10.4992/jpsy.49.303
- Muris, P., Merckelbach, H., & Damsma, E. (2000). Threat perception bias in nonreferred, socially anxious children. *Journal of Clinical Child Psychology*, **29**, 348-359.
- 小川捷之 (1974). いわゆる対人恐怖症者における「悩み」の構造に関する研究 横浜国立大学教育紀要, **14**, 1-33.
- 岡田涼・谷伊織・大西将史・中島俊思・辻井正次 (2012). Child Social Preference Scale 日本語版の作成 心理学研究, **83**, 44-50. doi: 10.4992/jpsy.83.44

- 岡島義・福原佑佳子・秋田久美・坂野雄二 (2008). Liebowitz Social Anxiety Scale for Children and Adolescents (LSAS-CA) 日本語版の作成 児童青年精神医学とその近接領域, **49**, 531-540.
- Orobio de Castro, B., Veerman, J.W., Koops, W., Bosch, J.D., & Monshouwer, H.J. (2002). Hostile attribution of intent and aggressive behavior: A meta-analysis. *Child Development*, **73**, 916-934. doi: 10.1111/1467-8624.00447
- Rapee, R.M. & Sweeney, L. (2005). Social Phobia in Children and Adolescents: Nature and Assessment, In W.R. Crozier and L. E. Alden. (Eds.) *The essential handbook of social anxiety for clinicians*. NY: John Wiley & Sons, pp. 133-151.
- 笹川智子・高橋史・佐藤寛・赤松亜紀・嶋田洋徳・野村忍 (2009). 日本の児童生徒における社会不安の特徴: Social Phobia and Anxiety Inventory for Children (SPAI-C) を用いた検討 心身医学, **49**, 909-921.
- Schneider, B. H. (1999). A multimethod exploration of the friendships of children considered socially withdrawn by their school peers. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **27**, 115-123. doi: 10.1023/A:1021959430698
- Spence, S. H., Donovan, C., & Brechman-Toussaint, M. (1999). Social skills, social outcomes, and cognitive features of childhood social phobia. *Journal of Abnormal Psychology*, **108**, 211-221. doi: 10.1037/0021-843X.108.2.211
- 菅原健介 (2003). Shyness の発現要因に関する行動遺伝学研究 平成14年度厚生労働科学研究報告書 非行・ひきこもり等の児童問題対策に関する研究 (研究代表者: 菅原ますみ), 584.
- 須見よし乃・國重美紀・館農勝・氏家武・堤裕幸 (2010). Liebowitz Social Anxiety Scale for Children and Adolescents 日本語版の信頼性と妥当性の検討 日本小児科学会雑誌, **114**, 1185-1193
- Sumter, S. R., Bokhorst, C. L., & Westenberg, P. M. (2009). Social fears during adolescence: Is there an increase in distress and avoidance? *Journal of Anxiety Disorder*, **23**, 897-903. doi: 10.1016/j.janxdis.2009.05.004
- 外山美樹 (2003). ポジティブ [ネガティブ]・イリュージョン現象の発達の变化 (発達, ポスター発表 D) 日本教育心理学会総会発表論文集, **45**, 345.
- Vassilopoulos, S. P. (2006). Interpretation and judgmental biases in Socially anxious and nonanxious individuals. *Behavioural and Cognitive Psychotherapy*, **34**, 243-254. doi: 10.1017/S1352465805002687
- Vassilopoulos, S. P. & Banerjee, R. (2008). Interpretations and judgments regarding positive and negative social scenarios in childhood social anxiety. *Behavior Research and Therapy*, **46**, 870-876. doi: 10.1016/j.brat.2008.03.008
- Voncken, M. J., Bögels, S. M., & de Vries, K. (2003). Interpretation and judgmental biases in social phobia. *Behavior Research and Therapy*, **41**, 1481-1488. doi: 10.1016/S0005-7967(03)00143-8
- Westenberg, P. M., Drewes, M. J., Goedhart, A. W., Siebelink, B. M., & Treffers, P. D. A. (2004). A developmental analysis of self-reported fears in late childhood through mid-adolescence: Social-evaluative fears on the rise? *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, **45**, 481-495. doi: 10.1111/j.1469-7610.2004.00239.x